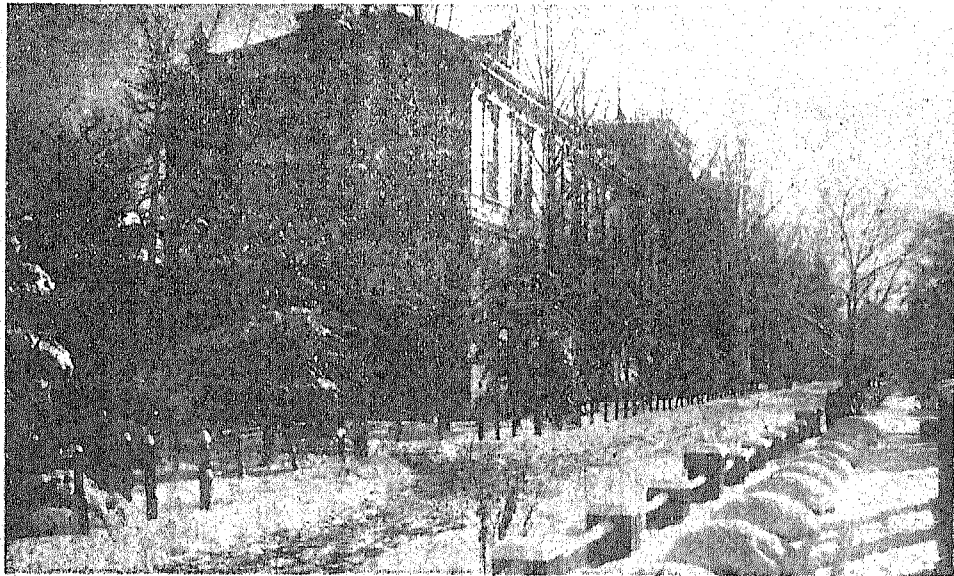


報會曲千

日五十二月二十年七十和昭

號三十二第

會曲千人法團社



校母の雪初

目次

- △大昭奉戴日一周年記念日の訓辭……………井上柳梧(二)
- △石倉先生御勇退せらる……………(三)
- △學校引退之辭……………石倉新十郎(三)
- △石倉先生を送る……………井上柳梧(三)
- △石倉先生の御勇退を惜む……………蒲生俊興(四)
- △石倉先生を送る……………野口新太郎(四)
- △石倉先生の御退職……………小松忠一(五)
- △巡視村瀬儀市氏御退職……………(六)
- △村瀬巡視送別の辭……………K T 生(六)
- △科學點描(7)……………(六)
- ロケット爆彈登場
- 珪肺とアルミニウム
- 超高壓下の原形質
- △隨筆 戰線懷古……………在滿池内真吾(七)
- △東部高農蠶水桑道大會記……………(七)
- △母校便り……………(九)
- 岡田準次教授新任
- 陸軍被服廠精谷少佐一行來校
- 運動場の擴張成る
- マラン大會
- 日本纖維研究聯盟聯合講演會開催さる
- プールの建設決定
- 第二回行軍競技
- 赤尾英三氏の實戰談
- 小松教授歸校
- △地方通信……………(一〇)
- 東京千曲會總會記
- 岡部彌平氏の偉業
- △本會記事……………(一〇)
- 本會目録
- 支會役員交迭
- 支會設置
- 就任後金應募者
- 遠藤先生退官記念品受領報告
- 會費領收
- △就任辭令……………(一一)
- △計報……………(一一)
- 戰死會員遺族よりの禮狀
- 弔慰金募集
- 弔慰金報告

畏くも米英撃滅の大詔を奉戴してより茲に一ヶ年、皇軍將兵の善謀勇戦により不敗の態勢を確立して今日十二月八日感激の一周年を迎へた。日本國民は皇恩に感激し、忠勇なる將兵への無限の感謝と信頼を捧げつゝ、究勝の決意を新ししたのである。

此の日母校に於ては記念式後護國神社參拜、市内大行進を行ひ意義ある一日を過ぎしが、特に校長先生には式中次の如き訓辭を與へ全學生に對し一段の奮起を促した。

大詔奉戴日一周年記念日の訓辭

井 上 柳 梧

畏くも米英に對して宣戰の大詔を奉戴して我國民は感激に燃えて一億一丸となりて米英撃滅、大東亞共榮圈の確立のため立上つてより已に一ヶ年、本月十二月八日の意義深き記念日を迎ふるに至つた。吾々は茲に過去を顧みて將來に對する心構えを一層強化することは最も重要な事と思ふ。

顧みれば昨年十二月八日以前に於ては米英は所謂A B O D包圍陣と誇稱し馬蹄形陣を形成して軍事攻勢の據點とし、或は經濟封鎖を斷行して我國に威脅を以て臨んで居つたのである。然るに一度戰爭開始されるや我が忠勇無比なる將兵は迅速果敢なる電撃作戦により脆くも包圍陣は潰滅に歸し今や全く逆に大東亞共榮圈を防衛する前哨基地として更生し、彼等の攻守は全く一變して永年に渡りて彼等の跳梁を恣にした大東亞の地に一人の米英軍も一片の米英の基地をも残さざるに至つたのである。此の赫赫たる大戦果に就て我が忠勇なる皇軍將士に吾々は深甚なる感謝と敬意を表すると共に護國のたゞめに尊くも散つた幾多の英雄に對しては謹みて敬弔の誠を捧げる次第である。

此の一ヶ年にして我國は大東亞に不動の戰略態勢を打ち立てたのである。即ち東方に於てはアリユージアン列島の西端

鳴神、熱田の兩島より一路南下して大島、ギルバート諸島、ソロモン群島の線に到る迄進出し、更にソロモン島より西にしてニューギニア、チモール島、小スンダ、大スンダの兩列島を経て北に延びて馬來半島、ビルマに到る弧を畫き、其中にセレベス、ボルネオを包含し友邦泰國、佛印をも包含してゐる。而して又比島、香港、昭南島も悉く我が配下に歸したのである。更に印度洋、西太平洋に對しても堅固なる外壁を築き上げたのである。以上の吾國防線によりて北はアリユージアン列島を通じてカナダ及米國の西海岸に對して強壓を加え、南は米濠聯絡線の切斷の態勢を整へ、西は印度への進出並びに南亞及西亞を結ぶ聯絡線に對し多大の脅威を與へると云ふ攻守兩様の強力なる構えを造り上げる事となつた。南方の諸地に於ける治安の回復が急速に進行したため支那大陸に於ける如くゲリラ戰による戦力の消耗はなく、我が精銳は戦鬪の疲弊の回復すると共に、大東亞共榮圈の練に専念することが出来、大東亞共榮圈の一席に事が起れば直ちに馳せ向ひ得る待機の状態にあるのである。而して南方の諸地域は軍需資源の世界的寶庫であり此れが開發も益々進展しつゝある今日我が戰略的の態勢は開戰前に比して比較

のならぬ程の優越的地歩を占むるに到つた。

是に對して敵陣營の情勢を見るに米英蘭濠の各部隊は開戰以來敗戦に敗戦を重ねて遂に東亞に於ける據點を悉く失つたのであるが、今や緒戦に於る大敗の混亂より脱して次第に立上り去る八月月上旬より反撃に出んとしてゐるのである。開戰前の對日包圍陣は潰滅に歸したる爲に彼等の對日前哨線は著しく後退したのであるが然し依然として遠巻きに包圍態勢を整へようとしてゐるのである。即ちアリユージアン列島よりハワイに南下し、濠洲に到り印度洋を遙かに迂回して印度に達し更にカルカタを経て重慶に達し重慶をして米の前哨基地としてゐるのである。尙あはよくば機を見てソ聯を包圍の一環に加へんとしてゐるのである。此の所謂第二次包圍陣と稱するものは至る所に脆弱なる點を露呈し更に戦線の後退によりて著しく廣大して作戦の不利を益々増大ならしむる状態にあるのである。

然るに米英敵陣は依然弱體なるにも拘らず今や敗退より挽回して眞劍に攻勢に出でんとする情勢を示しつゝある。先に八月以來のソロモン諸島方面の大海戦の戦はれつゝあるのは其の現はれに外ならぬのである。吾々は此れに對し益々緊張の目的完遂に邁進しなければならぬのである。

本日茲に宣戰の大詔奉戴一周年を迎ふるに當り一ヶ年に於ける皇軍將兵の赫赫たる大戦果を追想し、吾々は諸君と共に一層奮勵努力日々の業務に精進して國恩の萬分の一に酬ひ奉るべく一層の決意を強化しなければならぬ。

新任御挨拶

謹啓 時下秋冷の候各位益々御清穆奉賀上候者小生儀今般不圖本校教授を拜命任り學士課に勤務致す事と相成候に就ては微力奉職に全生命を打ち込んじ就ては御座候何卒宜敷御指導御鞭撻の程御願申上候 敬具

先は右御挨拶迄如斯御座候

昭和十七年十月一日

學生課

岡田準次

御挨拶

謹啓 時下向寒の候益々御清穆之段奉賀上候者不肖儀馬縣職中は公私共格別な御懇情を辱ふし洵に難有感謝銘記に取給に就て是等御賜短紙に御禮申上候今般不圖本校教授を拜命任り學士課に勤務致す事と相成候に就ては微力奉職に全生命を打ち込んじ就ては御座候何卒宜敷御指導御鞭撻の程御願申上候 敬具

先は右御挨拶迄如斯御座候

昭和十七年十一月

土屋孝

會社前 前橋市清王寺町一毛

自宅 前橋市清王寺町一毛

御挨拶

拜啓 時下寒冷之候益々御清穆之由奉賀上候者不肖儀文部省依命職維新の由及中華民國內閣次長に依り奉命現地同窓各位は勿論現地軍官民各位の其間現地同窓各位は勿論現地軍官民各位の成に御挨拶迄如斯御座候今般不圖本校教授を拜命任り學士課に勤務致す事と相成候に就ては微力奉職に全生命を打ち込んじ就ては御座候何卒宜敷御指導御鞭撻の程御願申上候 敬具

先は右御挨拶迄如斯御座候

昭和十七年十一月十五日

上田蠶絲專門學校

小松忠一郎

石倉先生御勇退せらる

母校の石倉新十郎先生が突如御引退遊ばさるゝことになつた。絹紡織科の眞の生みの親であり、開校以來實に三十有餘年溢るゝ誠意と熱情を以て我々の指導訓育に盡瘁せられた先生が限りなき惜別の情を久遠に殘して母校を御去りになることになつたのである。會者定離の理ありとは云ひ乍ら先生の御風格に親しく接したる者御薫陶を受けたる者、何せう惜別の情を禁じ得やうか。

爾後先生は東京の御家庭に一家團樂悠々自適趣味の御生活を送らるゝ由と承る。先生よ、益々御健康に御留意遊ばされ、末永く御垂教賜はらんことを。こゝに恩師石倉先生の御引退を普く報じて以下惜別の玉稿を掲ぐる次第である。

石倉先生の御經歷

明治十八年九月廿六日 群馬縣群馬郡白郷井村大字上白井村ニ生ル

明治三十七年三月 群馬縣立前橋中學校卒業

全 四十年 七月 第六高等學校卒業

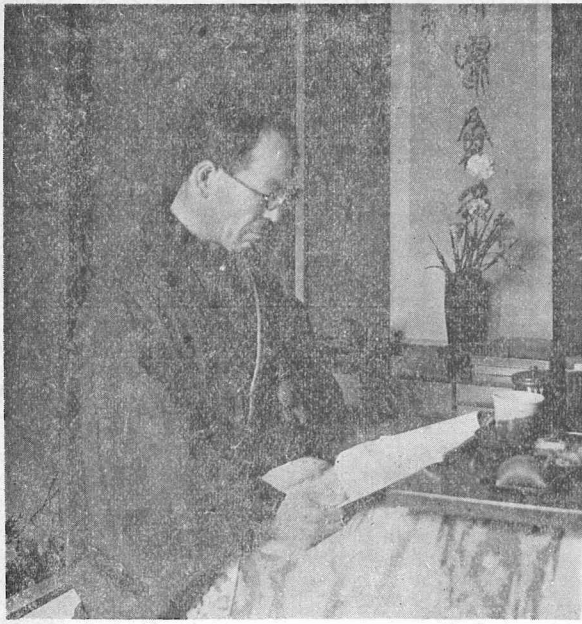
全 四十四年 七月 東京帝國大學工科大学

全 四十四年 十月 本校絹紡績學及機械學受持講師ヲ囑託ス

大正二年三月十四日 任上田蠶絲專門學校教授

全 四十四年 五月十三日 陸高等官七等

全 四十四年 六月三十日 陸高等官六等



(影 近) 生 先 倉 石

僅に二、三年のつもりが創立の多忙に氣をとられ、つひ請はれるまゝに教授にもなれば紡織科長にもなり、荏苒二十年を経て歳四十八、漸く退官して愈々引退するつもりが又延びて茲に三十有一年、憶へば全く豫定外の人生を踏み來つたものである。教育とは何か、稍々會得したと感じた頃漸く引退の機會を得たわけ。省れば自分の非教育は慚愧の至りであり卒業生諸氏に全く申譯ない次第である。

引退して今考へれば恰も登山の後の如く、凡ての苦痛は殆ど忘れ去り、殘るは唯愉快な記憶ばかり、眞に明朗であり、幸であり、感謝の至りである。いざさらば。

學校引退之辭

石倉新十郎

全 六年 九月二十二日 陸高等官五等

全 六年 十月二十日 陸從六位

全 七年 十二月廿六日 絹紡績並燃絲機織論研究ノ爲滿一箇年間米國佛國伊國へ留學ヲ命ス

全 九年 六月廿八日 陸高等官四等

全 九年 七月卅一日 陸正六位

全 十一年 九月十八日 陸高等官三等

全 十一年 九月二十日 社會教育講師ヲ囑託ス

全 十一年 十月二十日 陸從五位

全 十一年 十一月三十日 陸從五位

全 十一年 十二月三十日 陸從五位

全 十一年 五月九日 絹紡績科長ヲ命ス

全 十一年 四月十六日 絹紡績科長ヲ命ス

全 十一年 三月三十日 絹紡績科長ヲ免ス

全 十一年 二月六日 陸高等官二等

全 十一年 二月十五日 陸從四位

全 十一年 五月十四日 特旨ヲ以テ位一級被進

全 十一年 五月十四日 特旨ヲ以テ位一級被進

石倉先生を送る

井上柳梧

逢ふは別の始めなりとは謂へ三十年の昔始めて先生を知りたる時如何にして今日の袂別を思ふものあらうか。三十年一日の如く親しく交り結び君に今別れんとす。誠に情緒纏綿として出づる所を知らないのである。先生は群馬縣群馬郡白郷井村大字上白井村の出身である。明治四十四年七月東京帝國大學工科大学機械科を卒業せられ、同年十月五日講師として我校に教鞭を取られたのである。我々創立されて授業開始されたのは明治四十四年四月十九日であるから、先生は實に學校が生れると同時に來られ學校を保育せられたのである。當時は養蠶、製絲の二科外居つたのである。創立當時の事であつたから授業の外に多くの雜務があり、多忙なりし日が多かつたが意氣潑刺たる青年の先生は非常なる元氣で居られたのである。當時は先生は寡く生徒も少數であつて誠に一家塾の様な氣分であつたのである。大正二年三月先生は教授になられた。大正七年十二月に米、佛、伊に留學せられる事になり翌大正八年三月十三日出發せられたのである。歐米の各地を見學せられた大正九年六月十四日無事歸朝せられたのである。學校に絹紡績科の出來たのは大正八年であつた。大正十四年に石倉先生が最初の絹紡績科長に就任せられたのである。當時我國には絹紡績工場は非常に寥々たる有様であつたのである。先生は非常な努力を重ねられた。我が校にあれ丈の機械を設備せられたのである。當時學校に學びたる生徒は他に見られない機械によりて紡績を學ぶ事が出來たのであつた。多くの會社の技師連も次ぎ次ぎに機械のスケッチをする爲めに來たのであつた。先

石倉先生の御勇退を惜む

蒲生俊興

先生は考案せられたる種類の装置を設けて絲の物理的性質に就きて數學的の研究を積まれたのである。特に撚りに就きて力學的研究を爲された。先生は特に繪畫に就きては趣味深く堪能であつた。先生の時々漏されたる處にあれば、先生は幼少の頃繪畫を志されたのであるが嚴父の御意志によりて機械學を専攻せられたのであると謂ふ事を思へば先生の繪畫は天才的であると想はれるのである。先生の繪畫は實に特有の趣きを持つて居るのである。先生は獨り繪畫のみならず書に於ても研鑽が深く更に篆刻にも趣味を持たれたのである。先生は一の理想を以て生徒を指導せられた。從つて先生の説かるゝ所も亦深き所であつたのである。昭和六年三月三十日先生は絹絲紡績科長を岡教授に譲られ其の翌年より講師として主として生徒の指導訓育に當らるゝ事となり茲に十年を経たのである。先生は實に我校開校以來の教授であり又我絹紡績科の創設者である。然も現下重大時局下に於て人才を要する事最も切なる時先生の如き偉才を學校より失ふは實に惜みても餘りあるのである。然し先生の御家庭の事情又已むを得ざるものあり四阿、烏帽子の山には雪を載きて昔日の如く天に聳え千曲の清流は千古變はらむ滔々として流れて止まず、只變るは人世のみ、茲に先生を送りて寂寞の情堪え得ざるものあり。先生は東京市板橋區下石神井の新邸に入られ専ら御令息の御訓育に當られると聞く先生の御健勝と御多幸を祈りて止まぬ次第である。大東亞戰下先生の如き機械權威者は國家としても最も要望せらるゝ所である。雲雨一度起りて蛟の騰り龍の驤る日の近からん事を念願する次第である。

茲に先生と訣別するに當り三十年の背を追想して先生を送る辭とする。

明治四十三年本校開校以來實に三十有餘年の長い歲月を上田で送られ、針塚前校長の片腕となつて學校の創立から特に絹紡績科の創設に對し、至大な功績を建てられた石倉先生が此度御家庭の都合上御勇退せらるゝこと、なつた事は母校の爲め寔に痛惜にたへない次第である。

長い間御薫陶を受けた私共殊に先生が廿七八才の血氣漲る時代から斷えず先生の御人格に觸れ、師として又先輩として尊敬申上げて來た者に取ては、學校に於ける先生の御存在が如何に華々しく樞要なものであつたかが判るのである。それだけに先生を送つた學校が非常な寂しさとたよりなきさを感じざるを得ない。

先生は極めて多感的な熱情のこもつた方であり、又甚だ多面的に豊饒な常識と近頃珍らしい程勇氣に富んだ奥ゆかしさを多分に持たはされて居たから、先生に私淑した者は皆均しく敬慕して已まない次第である。事に當て事理の判斷には先生の明晰な頭腦とあの天真爛漫な態度で論斷されるから到底他の追隨を許さぬ力強さを感じしめた。それだけ先生は極端な理想主義者の如く又一種の藝術至上主義的な半面も見え動もすれば些々たる曲解か理解する者から見れば之は先生の極めて眞剣な態度の發露であり、又平素如何に學校の改善と學生の養育上に益を、熱情を注がれてゐられたかが察せられ、先生の誠意に對しては只管感激措く能はざる所である。

又兎角瑕玼に充ちた私などは、いつも先生から御叱正を受け、處世上に於ける各般の御注意を蒙り屢々鐵槌を頂戴した一人であつた。先生は何處となく禪味豊かな薫陶を愛好してゐられた様にも見え、私は何時も先生の

人と爲りを評して明鏡止水の如しと申上げてゐたのである。

先生は誰も知る如く繪畫には極めて堪能で殆ど支那の域に進まれ、當校に於ける甘茶美術展覽會の發展向上に對しては常に多大の御盡力を賜つたことは永へに銘記せねばならぬ所である。藝術—科學—宗教の三角關係が先生に於て明かに正の相關々係を有つことは先生の御性格を知悉する者には容易に領かれることである。先生は極めて藝術的な半面が有つて常に處世上に最高美を渴仰してゐらるゝ優雅な態度が掬せられると同時に、一方極めて獨創的な研究着想に富まれて何時も最高の眞理を追究して止まない様子も窺はれ、又他の一面に於て先生は極めて宗教的な熱情家であられた。從て是等の觀點から先生は實に理想な教育者であり、現下の如く眞の教育者を要望するの切なる折柄先生を送ることは誠に残念至極である。

今や先生と訣を別つに當て、洵に感慨無量なるものがある。冀くば先生よ、益々御自重自愛せられ、現下の多難なる時局に於て國家の最も要請する先生の御専門を愈々活用せられ、益々御健在にて御盡瘁あられ、御在校當時と變りなく御垂教を仰ぎ度い次第である。茲に先生を送るに當り乍ら粗忽一言感懷を吐露して母校に對する多大の御功績を讃へ、併せて向後の御多幸を祈念する次第である。

石倉先生は此の十二月限を以て母校の教職を辭されて東京へ引上げられる事になつた。

石倉先生を送る

野口新太郎

石倉先生は此の十二月限を以て母校の教職を辭されて東京へ引上げられる事になつた。

誠に感慨無量、惜別の情に堪へない。

先生は一昨年の春長らく御いでなされた北大手町のお住ひを引き續つて御家族は東京へ御轉居され、先生のみ御一人で間借生活を開始されたので、もう當時から或は御引生活を御準備の第一歩かも知れないと思はれられ淋しい氣がしたのであつた。然し其時期が斯様に早く來やうとは思はなかつた。

先生には健一君と云ふ御一人息子があられ來年大學を出られる筈である。大學を出ると無論すぐ軍隊に行かれる譯であるから、此處當分親子三人團圓の生活はそれ迄の間である。之が斯様に退職を急がれた御事由ではなからうかと御想像申し上げ、人間石倉先生の面影が何へ一層しみんとした氣持になる。そして又そう何へば強いてお引留も出來ないのである。

先生が初めて母校に赴任されたのは明治十四年九月——先生が大學を卒業されてすぐ——ときから本校が開校され第一回生が入學して間もない時の事である。それから今日迄足掛三十二年、年數も長いが又其の間に於ける先生の御功績は更に大なるものがある。

母校は開校當初から針塚校長の抱負により養蠶から紡績織物に及ぶ蠶業を一貫する教育機關たるべくスタートしたのであるが、最初は豫算や設備等の關係で、まづ養蠶製絲の二科のみであつた。從つて開校當時の職員は皆養蠶或は製絲を専門とする方々なので工學方面に關する事はどなたともと不案内であつたらしい。

されば石倉先生は此處に立つて唯一の工科の先生(大瀧先生は當時御外遊中)として諸設備の設計及建設監督一切の任に當られ、其の御苦心は實に想像に餘るものだつたとき母校の設備が今日數ある諸學校中猶優れたりとして誇り得るは、勿論針塚校長の慧眼による建設方針によるものなるも、又他には

當初之が實施の任に當つた石倉先生の御功績によるものと云ふべく、先生は正しく母校開校史上に特筆すべき功勞者の御一人であらうと信ず。

先生が母校絹紡績科(絹紡織科)の生みの親である事は誰しもが知つてゐる所であるが、尙先生が我國で初めて絹紡績學なる講座を創設された事の御功績については餘り氣付かない者があつたかも知れない。母校が開校された時分の我國の絹紡績業は勿論まだ今日の如き盛大なものではなかつたが、それは全く鐘紡及富士紡二社の獨占に委ねられ其の技術の内容については到底他の校で絹紡績學なる講座を開講されたのであつた。勿論大學で機械學を専攻されて来た先生等問題は無いのであるがそれだけでは専門學校の講義にはならない、是非此の理論に技術の實際を添はせなくてはならない。そこで先生は自ら職工となつて鐘紡工場に入られその技術の實際を研究されたのである。母校絹紡績學講座の開設が斯業發達の礎因となつた事は誰しも知る所であるが、その創設に當つて斯くの如く涙ぐましく御苦心の拂はれてゐる事を誰が知るか。我々先生の子弟たる者はよく此の事實を銘記し更に一段と精勵を契はねば申譯ないと思ふ。

其他先生の本校に残された御功績は擧げて數へられないが、尙特に深く感ぜられる事は先生の訓育指導に於いての御功績である。一體學生の指導訓育は皆につけた教室の訓話等では實功は少ない、どうしても學生の日常生活、趣味、運動、娛樂等を通して深く學生の氣分に解けて之を指導するの多趣味多能能ののである。然るに先生は實に多趣味多能能に亘られたのでこれを通してどれ程學生と親密であられた事か、諸曲會、書道會、甘茶會等々、之等は皆先生を中心として生れた職員學生混合の會であり、それによつて職員と學生との連絡が通がどれ程はかられた事か、そして此間に自然に先生の御人格が學生の心に映つたのである。先生のあの高き風格、又あのひたむきの熱情、さてはあの特種な御氣性

或は又あの豊かな情操等々何れも若き多感な學生の心に映つて強く生長しそして實を結んだのである。誠に先生の此の人格による學生御指導の成果こそ他の何物にも比し得ない偉大な御功績であらう。

時局は愈々重大であり、業界益々多難であり、學校の將來一層多事である。此際先生の如き強力な支柱を失ふは誠に淋しい。先生は御健康は愈々御好調の様だし、御元氣は寧ろ若者もはしたし、御盛さだし、御心算は茲に先生の新しい御生活の御前途に對し心より御祝詞を申し上げる所は業界の難局に對しし學校の將來亦多事の時、多々の關心を煩はし、先生を送る事である。我々先生の衣鉢を繼ぐ者正に緊要一番努めて御期待に添ふ様心掛けねばならない。

石倉先生の御退職

小松忠一郎

東京ならぬ都府遠く遠い所でもないからどうぞ御餘暇ある都府御來遊下され相變らざる御指導を御願ひしたい。我々も亦折々御邪魔して御叱咤を仰ぎたいと思つてゐる。先生も御機嫌宜敷う。(一七、一八、一九、二〇)

先生が本校へ御退職なさる事は、我々としては誠に淋しい。先生は御健康は愈々御好調の様だし、御元氣は寧ろ若者もはしたし、御盛さだし、御心算は茲に先生の新しい御生活の御前途に對し心より御祝詞を申し上げる所は業界の難局に對しし學校の將來亦多事の時、多々の關心を煩はし、先生を送る事である。我々先生の衣鉢を繼ぐ者正に緊要一番努めて御期待に添ふ様心掛けねばならない。

先生が本校へ御退職なさる事は、我々としては誠に淋しい。先生は御健康は愈々御好調の様だし、御元氣は寧ろ若者もはしたし、御盛さだし、御心算は茲に先生の新しい御生活の御前途に對し心より御祝詞を申し上げる所は業界の難局に對しし學校の將來亦多事の時、多々の關心を煩はし、先生を送る事である。我々先生の衣鉢を繼ぐ者正に緊要一番努めて御期待に添ふ様心掛けねばならない。

先生が本校へ御退職なさる事は、我々としては誠に淋しい。先生は御健康は愈々御好調の様だし、御元氣は寧ろ若者もはしたし、御盛さだし、御心算は茲に先生の新しい御生活の御前途に對し心より御祝詞を申し上げる所は業界の難局に對しし學校の將來亦多事の時、多々の關心を煩はし、先生を送る事である。我々先生の衣鉢を繼ぐ者正に緊要一番努めて御期待に添ふ様心掛けねばならない。

先生が本校へ御退職なさる事は、我々としては誠に淋しい。先生は御健康は愈々御好調の様だし、御元氣は寧ろ若者もはしたし、御盛さだし、御心算は茲に先生の新しい御生活の御前途に對し心より御祝詞を申し上げる所は業界の難局に對しし學校の將來亦多事の時、多々の關心を煩はし、先生を送る事である。我々先生の衣鉢を繼ぐ者正に緊要一番努めて御期待に添ふ様心掛けねばならない。

先生が本校へ御退職なさる事は、我々としては誠に淋しい。先生は御健康は愈々御好調の様だし、御元氣は寧ろ若者もはしたし、御盛さだし、御心算は茲に先生の新しい御生活の御前途に對し心より御祝詞を申し上げる所は業界の難局に對しし學校の將來亦多事の時、多々の關心を煩はし、先生を送る事である。我々先生の衣鉢を繼ぐ者正に緊要一番努めて御期待に添ふ様心掛けねばならない。

先生が本校へ御退職なさる事は、我々としては誠に淋しい。先生は御健康は愈々御好調の様だし、御元氣は寧ろ若者もはしたし、御盛さだし、御心算は茲に先生の新しい御生活の御前途に對し心より御祝詞を申し上げる所は業界の難局に對しし學校の將來亦多事の時、多々の關心を煩はし、先生を送る事である。我々先生の衣鉢を繼ぐ者正に緊要一番努めて御期待に添ふ様心掛けねばならない。

惜

先生が本校へ御退職なさる事は、我々としては誠に淋しい。先生は御健康は愈々御好調の様だし、御元氣は寧ろ若者もはしたし、御盛さだし、御心算は茲に先生の新しい御生活の御前途に對し心より御祝詞を申し上げる所は業界の難局に對しし學校の將來亦多事の時、多々の關心を煩はし、先生を送る事である。我々先生の衣鉢を繼ぐ者正に緊要一番努めて御期待に添ふ様心掛けねばならない。

巡視村瀨儀市氏御退職

開校以來十年一日の如く母校を災厄から守り通した村瀨儀市氏は十二月七日付を以て御退職されることになつた。精勵奮勵よく巡視の責を果し、母校を以て常に無事安泰ならしめたのも實に氏の隠れたる功績と云ふべきである。此の報に接したる者必ずや氏の懇切温順なる風貌を想起し感慨を新たにすることであらう。ここに村瀨氏の別離を惜しみ御餘生の益々御多幸を祈つて已まない次第である。

村瀨巡視送別の辭

K T 生

此度村瀨巡視の勇退に際し聊か惜別の感に打たるゝものがある。其れは本校の開設と村瀨君と昔ふても過言にあらざる程學校とは多分な關係にあるからである。本校が明治四十二年三月設置を公布せられ、明けて四十四年二月當時上田町の本校に於て事務を取扱ふ旨告示せらるゝと時を同じふして、上田中學校寮藤書記の推薦に依り日給三十錢の本校巡視を拜命したのであるが、其の時君は三十歳であつた。そして又君は日露戰役に従軍して名譽の戦傷により後退を被命した勇士であり、明治三十九年四月勳八等功七級を拜領して居る傷痍軍人である等當時の事に想ひを馳せて見よう。さて當時の校舎は本館と其の裏の生徒控室及蠶體病理實驗室の一部と建築中の養蠶一號蠶室であつた。其れ以外の建物は何も無かつたのであるから、廣い野原に二、三の建物があるとした今の様な木も無い荒涼たるものであつた。然して玄關を上つて左側の室が會計課と學生課、右側が庶務課と教務課の一室合同事務で各課長等も未だ全部専任されて居なかつた。前田庶務課長と池田會計課長の二人位で教務課と學生課は坂部君が兼務して開校當初の事務に活躍して居た。君が奉職して三年目大正二年の十月開校式が舉げられたのである。其開校式には稍整備の感があつたが現在から追想する時實に無量の感がある。

ある。そして其の開校式後學校縦覽及展覽會等を催したため長野縣に蠶絲専門の高等學校が出来たと昔ふので毎日素晴らしい人出であつた。あまりの人出で押されて茶婦人が分難したと言ふ様な氣の毒な事件もあつた程である。彼氏想ひ起して見る時村瀨君は開校前からの勤績者丈に學校と村瀨君は學校に取つて縁念淺からざるものがあり、又學校の是迄の沿革等に就いても一番よく知つて居られる。村瀨君が奉職以來實に三十一箇年八月月の間夜々として自己の本務を全したのであるから敬服せざるを得ない。君は資性、温厚篤實、品行方正にして執務熱心、常に精勵奮勵眞に模範巡視と謂ふを得べく職員は等しく崇敬して居つたのである。君は内に在りては職員相互の親睦を計り永く専交會幹事長として勤績中其成績顯著なるを認められ専交會顧問に専交會長及びは學校長より表彰を受けること實に六回に及び、外に在りては上田市長の推薦に係る左記の如き表彰がある。

表彰

村瀨儀市

傷痍軍人トシテ克ク身體ノ障礙ヲ克服シ再起奉公ノ誠ヲ致ス其ノ志行洵ニ他ノ模範トナスニ足ル仍テ茲ニ之ヲ表彰ス
昭和十七年十月三日

長野縣知事從四位勳三等 永安百治
此れは長野縣内傷痍軍人唯一人の表彰状と
の事である。他の一枚は

村瀨儀市

大日本傷痍軍人會長長野縣上田市分會第四區連絡指導員ヲ命ス
昭和十六年十月一日
大日本傷痍軍人會長野縣支部長
鈴木 登

等があり君の人柄推して可知ものがある。惟ふに君は天授の業務に忠實であつた事は以つて吾々軌範とするに足るのである。君は寶器正に六十一歳であるが頗る健康である。四、五年前一人の息女を亡くしたが今二人の子息が夫々働いて居る。君惜むらくは乾坤一擲最後奉公の意氣を持せられ今一度榮職に就かるゝの目を祈りて燕辭としたいのである。乍末筆御自愛を乞ふ。
(昭和十七年十二月十六日記)

科學點描 (7)



ロケット爆彈登場

第十七號の本欄でロケット飛行機の出現を報じたが、今度は爆彈にロケットを利用した話。

去る六月獨伊聯合空軍は地中海に英護送船團を襲撃し、空前の戦果を挙げたが、この戦團に新兵器「ロケット爆彈」を使用して大いに効果を収め、聯合國側を面喰はせた由である。

この「ロケット爆彈」を投下するとき爆撃機は何れも高度を下げて低空に舞ひ下り、機體を離れた爆彈は末端の排氣口から物凄い火花を散らしながら猛烈な勢で目標に飛びかゝつてゆく、その破壊力は従来の爆彈に比類のない程熾烈なもので堅固な目標物もこの新兵

器に遭つては容易に爆碎され、しかも命中率は極めて正確であるといはれる。この爆彈は飛行機の下部に裝填され、その操作は操縦士が電氣仕掛のボタンを押すことによつて簡單に行はれるといはれ、その性能は戦車攻撃に際しても急降下爆撃より一層効果的であるといはれてゐる。(科學技術動員から)

珪肺とアルミニウム

紡績女工の結核の原因は綿の埃ではなくて宿舎生活の管理の不合理からであると云はれる。工場に埃はつきものであるが其の多くは有害作用をあらはさない。ただ二、三の有害物がある。其の代表的ものは酸化珪素を含む埃である。此れは鐵、炭山や金屬工場に多い。酸化珪素が沈澱すると肺の呼吸面が少なくなるばかりでなく結核になり易い。此の珪塵を無害にする方法として此の方面に働く人々にアルミニウム粉末を吸入させて置くと此れが珪塵のまはりにつ着して珪塵の有害作用を除き單に異物としての作用しかしなくなると云ふ。珪塵の有害作用を除くと共に結核の豫防法として實施されてよい。(發明より)

超高壓下の原形質

原形質の流動は植物の葉の細胞、運動するアミイバの細胞、分裂する動物の細胞、魚の皮膚の色素細胞等によく見られるが此等の原形質の流動は高壓によつて停止する、即ち壓力の増加と共に原形質の流動しない部分にまづ機能の癱瘓を起し液状から膠状への變化が止る、此れによつて原形質の流動は次第に緩漫となり一平時當五千封度の超高壓下に於ては完全に停止してしまふものである。

(科學叢報より)

隨

戰線懷古

筆

在滿池内眞吾

抗日の首都だつた南京が名實共に陥落したのは丁度五年前の十二月十三日に當る。此の日南京の空には一片の雲もなく丁度内地の秋晴れを思はせる様な好天気であつた。私の屬して居た野口部隊から特に選ばれて(と云つては少し自惚れか)兎に角私の小隊は榮ある南京城の一番乗りをやり遂げたのである。あの十日から始まつた筆舌に盡し難い凄惨な死闘を繰り返して遂に南京城壁になだれを打つて殺到したのは十二年十二月十二日十二時(正午)と記憶してゐる。

私の小隊は例の矢ヶ崎部隊の第〇〇隊即ち唐澤少佐の許に配屬されたのである。丁度九日の日に我が松井軍司令官の名を以て、敵の防衛責任者たる唐生智に宛て、左の様な降伏勸告文が飛行機によつて投下せられた。其の大意は次の様であつた。

『日軍百萬既に江南を席卷し、南京城は既に我包圍中であり、戦局の大勢より見るに今後の交戦は只百害あつて一利なし。惟ふに江寧の地は中國の舊都にして民國の首府なり、明の孝陵、中山陵等古跡名勝各所に蟠集し、宛然東亞文化の精神の感あり、日軍は抵抗者に對しては極めて峻厳にして毫も寛恕せざるも、無辜の民衆及び敵愾なき中國軍隊に對しては寛大にしてこれを罰さず。東亞文化に至りてはこれを保護保存せんと欲す。然れども貴軍に於て交戦を繼續せんとすれば南京は勢ひ戦火を免れず。千年の文化は灰燼に歸し十年の經營は全く泡沫とならん。本司令官は日軍を代表し貴軍に勸告す。即ち南京城を速に和平裡に明け渡す爲左記の處置に出でよ』

大日本軍總司令官 松井 石根
本勸告に對する回答は十二月十日正午、中

山路句容道上の歩哨線に於て受領すべし。貴軍が司令官を代表する責任者を派遣するときは、該處に於て本司令官代表者との間に南京城接收に關する必要の協定をなす準備あり。若し該指定時間内に何等の回答に接し得ざるときは日本軍は止むを得ず南京攻略を開始せん。

この勸告文は二十四時間の期限付きであつたが遺憾なく唐生智の何等の回答に接し得なかつた我軍は時限が切れると同時に四方から一齊に攻撃の火蓋を切つたのである。股々たる彼我の銃砲聲は文字通り江南の山野を完全に塵に去つてしまつた。友軍の損害も相當に大きかつたが敵の屍體の多いにもおとろかされた。兎に角壕といふ壕は完全に敵の屍體で埋まつて居た。しかも我々は其の壕から一寸でも頭を出さうものならば忽ちにして頭部を貫通されて名譽の戦死を遂げる事受合ひである。それで止むを得ず敵の屍體の上をなめる様にして這つていつた。

かくして文字通り包圍圈を縮めて遂に南京城の兩華門(中華門から約五百米東方)に殺到したのは丁度十二月十二日の十二時であつた。そこで城門前のクリクにかゝつてゐた鐵橋(敵はこれを爆破し去つてゐた)に架橋の命令を受けて非常な苦心の後これを完成したのは午後二時半頃と記憶する。勿論城壁より浴せる機關銃の十字火の許の架橋であるから容易の事ではなかつた。

橋が完成するや否や更に我々は持參した爆薬によつて城内を爆破した。其の大音響をきいた時のところ、更に歩兵部隊が突入して遂に城内を占領し、しかも軍旗があがつたとさき感激、嗚呼其の時ほど男と生れたよつたことを感じた事は外に絶對に無い。萬歳を三唱したときは遙か東方に向つて感激の涙の雨頬に滂沱として流れるのを禁じ得なかつた。

あれからも丁度五年になる、不思議にも生命拾ひをして微傷だにも負はずに今こうして働かせて頂いて居る事を考へれば無量の

感慨に打たれるのである。今しづかに當時を回想すれば激戦だつた當時の出來事が遠く、過去の様に思ひも又ついで目にも思はれる。あの身邊に所きらず炸裂する敵の砲彈の響、晝夜を分たす無茶苦茶に打まくる敵の絶え間無い機關銃の音、果ては友軍部隊の苦戦を報告する傳令の悲壯な聲、又は前線に出やうとしてひしめいてあはれる友軍砲兵の馳馬の荒々しい息使ひ等、兩花臺に於ける情景が彷彿として耳目に表はれる。不幸この攻撃に散華した多くの部下の靈に對して其の冥福を祈ると共に心からの感謝の念を捧げるものである。

支那の軍隊は實に粘り強いにしつつかい、たつた一人になつてまでも尙且日本軍に抵抗しようとする。蔣介石の抗日教育の徹底してゐる事實におどろくべきものがある。この支那兵と比較して現在戦ひつゝある英米の兵とどちらが強いだらうと或る現役の隊長にきいた處即座に「それやあ勿論支那軍の方がはるかに強いだらう。何しろ奴等は一人々々が強い抗日意識に燃えてゐてからね」と答へられた。

東部高農蠶水柔道大會優勝戰記

聖戰第六年を迎へ、國民舉つて大東亞新秩序建設に邁進する秋、日本武士道の神髓たる柔道の精進する我柔道班は萬葉の櫻花香る四月奮き道場の一隅に熱血燃ゆる若人、三年連翹の傳業を月桂冠の幻影を追ひ今年八月堂々の陣を東京工大に駒を進め遂に常勝軍の名を天下に轟かし燦然と輝く紫の大旗を常田ヶ丘に！

九月世界の變轉と共に我々學生卒業縮緬我班の重鎮細田兄を初め十一兄を送つた。在校職員十三名、東部高農蠶水柔道大會十月十八日は迫る我々の一時、赤子の路頭に迷ふの感あり。我々は立つた。勝利不然死。守れ紫冠

其の強いと云はれて居る支那軍と戦つてみて成程強いと思つた事も再三再四ある。それぢやあどうして日本軍はそれ以上に強いだらうかといふわかり切つた疑問を抱いてみた。そこで反對に支那軍が負ける理由を二ヶ年に亘る戦闘で體驗してゐて感じた事を列記する。次の様に思はれるのである。

- 一、大君の御稱とならんと云ふ信念の無い事
- 二、必勝の信念が無い事
- 三、上官の命令が全然部下に徹底せぬ事
- 四、相互の連絡(即ち横の連絡)の全くない事

私はもう一度でよいから中支主として南京から杭州灣、上海附近を歩いて自ら苦戦して歩いた所を見學旁々戦死した部下の靈を叩ひたいと思つてゐる。現在中支に居らるゝ同窓生諸兄よ、願はくば我が足跡を印した杭州灣から南京に至る個所を將來御案内の勢を執られ賜ふ事を希望してやまぬ。

昭和十七年十二月南京陥落
記念日を目前に控へて記す
(筆者は蠶一九回卒)

東部高農蠶水柔道大會優勝戰記

理屈ではない實行だ。實行こそ勝利への正道だ。各員柔道場を血で染めよ、精神力だ、火の玉となつて練習した。十月を越へる頃には元氣回復意氣愈々盛。

十月十七日愈々来る日が来た。勝つのだ、石に噛りついても勝つのだ。早朝校長先生及び諸先生、報國國民に送られ必制覇を期し打揃つて帝都に向ふ。
東京高農に集ふ者上田蠶絲、東京高農、高農、農業教育専門、宇都宮高農、水産講習所、千葉高農の七校、昨年度までの五校に水産講習所と千葉高農の二校度ははり、之に七高農蠶水となり新發足をしたのである。

十月十八日、戦の前夜假りの態を圓かに結ぶ元氣一杯、一同全く必勝の一念に燃え勝るを誓ふ。朝八時半より幹事會あり、七校の中A組四校、B組三校、に分ち、各リーグ戦點取りにより最高點校が優勝戦を行ふ事に一決抽籤の結果A組東京高農、高農、農教、水講に、B組上田、千葉園、宇都宮の二組。

第一回戦 對宇都宮高農戦績

- 上田蠶絲(6) 宇都宮高農(1)
先○牧 井—X—坂口 (綾)
○△清水 水—宮崎 (大外)
○△辻 本—寺本 (逆)
○野 野—X—中田 (逆)
○野 中—熊本 (拂卷)
○野 中—德滿 (横四方)
○竹 重—田邊 (内股)
○△山 本—石坂 (跳腰)

第二回戦 對千葉高農戦績

- 上田蠶絲(10) 千葉高農(0)
先○牧 井—相原 (小外掛)
○松 井—谷村 (上四方)
○清水 水—萩原 (拂卷込)
○△辻 本—南 (大内、横四方)
○小 野—佐藤 (跳腰)
○野 野—清水 (内股)
○野 中—濱田 (逆)
○野 中—杉村 (十字園)
○矢 島—重木 (十字園)
○△山 本—日出柄 (上四方)

千葉高農に八對二にて勝ち本年度の陣容をと意氣高き宇農を先づ破る。
全試合時間二十四分、一瞬にして或は投飛し、或は絞落す、觀衆唯見守るのみ、その妙技に見入る。道場他方は眼敵水講と農教の大接戦。此處に於て我校はリーグ戦最高點を以

て優勝戦出場権を獲得す。A組も物凄き熱戦の結果左の如き得點にて水産講習所出場権を獲得す。

- A組 東京高農 14、農教 11、水産 17、東京高農 9、
B組 宇都宮 9、上田 16、千葉 2、出場校 A組 水講 B組 上田蠶絲

優勝戦 對水産講習所戦
日頃若淡たる大海を賑々たる大浪を相手に今日は朝から道場の他方で農教を、高農を、高農を蹴散らし制覇へと邁進し來たりし水講とこゝに一戦を交へむ。我等一層の緊張と意氣とを以て制覇戦へ。場内静まる。

- 上田蠶絲(9) 水産講習所(0)
先○牧 井—X—小林 (巴)
○△清水 水—梅本 (背負、拂腰)
○△辻 本—毛利 (拂腰、大内)
○野 野—土屋 (立四方)
○野 中—西谷 (返し)
○野 中—加藤 (大内刈)
○矢 島—重木 (逆)
○△山 本—伊東 (一本背負)

勝つた。我々は優勝したのだ。それよりも涙の方が先に流れた。負けた者より泣いた。あの舊き道場に輝しき常勝の傳統と紫、白の二旗を十三名の我々に「死んでも守れ之の榮冠を」と残し去られた先輩の凄惨とまで思はれた言葉が今は唯唯感謝の他は何物もない。又之も一途に岡班長先生、依田先生、湯原先生、の御熱心な御指導と、山寺先輩の日夜を徹した我々班員に對する深き愛情と御鞭撻及び在東京を初め全國の先輩諸兄の絶大なる御後援の賜と深甚なる感謝を捧げ、以て益々榮耀の道に技に一層邁進する覺悟を誓ひて筆を纏

明文堂

東京市神田區錦町一丁目四番 振替口座東京三一九〇番

Table listing various books and their prices. Columns include book titles, authors/editors, and prices. Categories include '農業一般' (General Agriculture), '農林' (Forestry), '園藝' (Horticulture), and '作物' (Crops). Examples of titles include '世界農業史', '日本農業史', '農林省要覽', '園藝學', '作物學', '果樹栽培法', etc.

母校便り

岡田準次教授新任

先般母校より陸軍司政官に轉出された行元自忍生徒主事兼教授の後任として岡田準次氏が九月二十三日付を以て母校教授に新任せられた。

同先生は兵庫縣の御出身で明治三十四年生れ、神戸一中、岡山第六高等學校を経て昭和二年京都帝國大學法學部を卒業され、更に同六年同大學文學部哲學科に入學教育學を専攻同九年卒業と同時に引續き同大學院に於て一層の研究を積まれた。其の間昭和九年七月より文部省教育調査部に勤務せられて今日に至つたのであるが、尙昭和十五年より東京寬眞専門學校に於て修身を講ぜられてゐた。同先生は哲學教育學に御造詣深く母校に於ては修身を御擔當されることとなつた。ここに篤學温厚の先生を迎へ母校訓育に期待する所大なるものがある。(寫眞は岡田先生)



陸軍被服廠粕谷少佐一行來校

十月二十二日、陸軍被服廠粕谷少佐は高木屬を伴ひ本校に來校し各科の内容設備を具に視察し歸京した。

運動場の擴張成る

修已寮の南側の縦約百米、横七十米の今迄の運動場では、グライダー、教練等戦時下學徒の鍊成を行ふ上に於て狹隘を感じるに至つたので運動場の東側の貴重なる桑園約五反歩を潰し電車線路迄擴張することに決定し、十月三十日に着手せる工事は學生の汗の勤勞により着々進行し縦二百米、横七十米の大グラウンドが完成した。

今迄も餘り廣くないと思つて居た母校の圃場が之で又大分狭くなつてしまつたのであるが、養蠶は勿論、棉、麻、羊毛と所謂纖維農業教育の擴充整備の叫ばれる今日廣々とした麻畑、棉畑或は綿羊が悠々と草を食む牧場が欲しいものである。

マラソン大會

十一月三日明治の佳節に當り母校ではマラソン大會を舉行した。コースは學校正門より上田橋、中之條、千曲公園前を経て鼠橋に至り下塩尻に出で塩尻國民學校前、秋和大神宮前、川原柳を経て學校に至る十八軒であつた。當日は學生の外に多數の職員が参加された。齋藤兩教授を始め町田助教其他の職員が率先陣頭に立つて走られ、氣勢が大いに上つた。優勝者には校長先生より賞品が授與された。

日本纖維研究聯盟聯合講演會開催さる

十月二十五日午前九時より母校講堂に於て日本蠶絲學會主催の下に第四回聯合講演會が開かれた。本邦纖維學會の名士多數が參列聴講者も約千人に及び仲々の盛會であつた。

Table with multiple columns listing authors, titles, and prices. Includes categories like '病害蟲・藥劑' (Pests and Medicines), '肥料' (Fertilizers), and '畜産' (Livestock). Authors listed include 田中諭一郎, 遠藤保太郎, 石山信一, etc.

プールの建設決定

母校では豫てより生徒に水泳の基本的訓練を行ひ國民皆泳の實を擧ぐ可き事を念願してゐたのであるが、此度工費約四千五百圓を投じて二十五米七コースのプールを建設する事に決定、場所は運動場西北隅野球ネット裏の溜池の所に定められ、生徒の勤勞奉仕により十一月九日頃より工事が始められた。明年六月迄には竣功の見込である。

第二回行軍競技

十一月二十八日土曜日の午後、第二回行軍競争が行はれた。此度のコースはマラソンと同一のコースで全長十八キロであつた。各クラスからは隊長以下七名の隊二組以上を出し各隊とも全力を盡して奮闘した。成績は左記の通りである。

順位	隊	組	所要時間		
			時	分	秒
1	1	1	42	46	34
2	2	1	46	48	16
3	1	2	50	50	12
4	2	1	50	53	42
5	1	1	54	57	35
6	2	1	54	57	47
7	1	4	57	58	0
8	2	2	58	59	8
9	1	1	59	1	4
10	1	1	59	1	6
11	2	2	59	1	7
12	1	1	59	1	9
13	2	2	59	1	7
14	2	2	59	1	9
15	2	2	59	1	7
16	2	2	59	1	7

赤尾英三氏の實戦談

舊贊助會員赤尾英三氏は三ヶ年間支那事變に参加し輝しき武功をたて、此頃目出度歸還し、十一月二十四日來校したのを機會に氏が参加した宜昌作戦に就いての戦闘經過を講演し、色々の苦心談や向ふの事情等を話し生徒に多大の感銘を與へた。

小松教授歸校

資源調査のため九月下旬より朝鮮、滿洲、支那方面に出張された絹紡織科小松忠一郎教授は任務を終へ十二月十二日元氣で歸校された。

地方通信

東京千曲會總會記

隅田の川風や、膚寒きを覺える霜月十八日の夕、柳橋三葉に於て東京千曲會昭和十七年度總會が開催された。最近の人口都市集中と同じ傾向の蠶統統制會社の創立、繭短絨織事業の進展等に伴ひ、本會の會員も漸増を示しつゝあり、當夜も集まる者五十八名、例年比し古老、新顔も大分出揃つて盛會であつた。六時開會、昭和十六年度決算報告、役員改選、第三回千曲會代議員選出及第三回代議員の提出議案を討議決定し、年一度の總額合せに一夕の歡談を盡して八時半散會した。尙新役員は會長野崎清、副會長味澤泰造兩氏の重任と決定し、幹事には高島(千葉)牧、荒木、岩本、古平、川村、竹内(好)の七氏が指命された。(一、二〇岩本記)

岡部彌平の偉業

岡部蠶絲研究所長岡部彌平氏(絲三回卒)の發明にかゝる特許第一五二〇六號岡部式自動繭膨解機が今秋開催された特許局發明展覽會に優等賞として入賞せられ製絲界に非常な人氣を呼んでゐる。即ち發明工業新聞第三百七十七號(昭和十七年十月五日發行)に依れば氏の發明せる該機の性能は「最も困難視された繭層の崩壊作業と同時に脱蛹作用が行はれ、繭ラップ歩留り百パーセントで、ネツプ皆無、未開繭絶無といふ製絲界未曾有の優秀さである。云々」とあり繭短絨織工業界にとつて劃期的發明であると激賞してゐる。之は洵に快報であり慶賀に堪へない次第である。

さあ二年目も

勝ち抜くぞ

本會記事

本會日誌

十一月五日 中會根長男氏逝去せらる、弔電を發す
十一月七日 第三回總會招集狀發信せり
十一月十日 針織賞委員會開會す
十一月十三日 故渡邊善次氏の公葬執行せらる
十一月十九日 唐澤正氏逝去せらる、弔詞を呈す
十一月廿一日 監事會開會す
十一月廿二日 第三回總會開會す
十一月廿三日 役員當選告知す
十一月廿六日 原利直氏逝去せらる、弔詞を呈す
十一月廿七日 坪満氏逝去せらる、弔詞を呈す
十一月三十日 役員改選及資産増額登記申請書提出す
十二月一日 故土屋久雄氏の村葬執行せらる、山口理事會葬す
十二月二十四日 故千曲會に於て總會開催左の通り役員改選せり

支會役員交迭

支會役員改選せり
支會長 島倉督造
副支會長 宮坂美壽雄
支會長 高味秀泰
副支會長 野崎清
支會長 川島五郎
副支會長 牧野男
支會長 岩本木村
副支會長 高島澤崎
支會長 古平健
副支會長 竹内義雄
支會長 竹内好義
副支會長 武雄次

支會設置

今回四國千曲會より分離し愛媛千曲會を設置せり、役員左の通り
支會會長 岸本勝市郎
副支會會長 岩田彌郎
幹事 成上尾八郎

統後資金應募者

- 1、金貳圓也 三好 彌市 山内 一次
- 右合計金四圓也
- 4、金拾圓也 岡部 彌平
- 右合計金拾圓也
- 累計金壹千五百七拾五圓四拾參錢也
- 遠藤先生退官記念品 (十二月五日)
- 贈呈資金受領報告 (現)
- 一金貳圓也 山内 一次
- 累計金八百貳圓也

會費領收

- 入會金納入者 (十二月五日現在)
- 石井 排一(壹圓)
- 昭和十七年度會費金四圓也
- 山口定次郎(壹圓)
- 遠山 正人(壹圓)
- 吉田 信伍(壹圓)
- 牧野 德太郎(壹圓)
- 入會金納入者 (十二月五日現在)
- 深井安兒夫(絲元)
- 丸岡 元(壹圓)
- 福島 正實(壹圓)
- 金五圓也 小林 茂(壹圓)
- 昭和十七年度會費金四圓也
- 味知 康三(壹圓)
- 小林 重男(壹圓)
- 清水 沈(壹圓)
- 横澤 正雄(壹圓)
- 三木 巧(壹圓)
- 宮川 政男(壹圓)
- 深井安兒夫(絲元)
- 昭和十八年度會費金四圓也
- 終身會費納入者
- 岡部 成吉(壹圓)
- 未納會費納入者
- 金八圓也 (昭和十五年、十六年度會費)
- 鈴木 英夫(壹圓)
- 金四圓也 (昭和十六年度)
- 向坂 朋二(壹圓)
- 池田 俊郎(壹圓)
- 深井安兒夫(絲元)
- 山崎管鏡(絲元)
- 金四圓也(昭和十一年度分)

叙任辭令

舊職員之部
 多賀高等工業學校教授 内田 浩
 三級俸下賜(十月三十一日) 陸軍大佐 谷 弘
 正五位
 任陸軍少將 敘從四位(十一月十四日)
卒業生之部
 朝鮮産業技師 尾見 祐八
 高等官五等待遇(九月三十日) 地方農林技師 門平潤一郎
 九級俸下賜(六月三十日) 正六位 中島 静太郎
 敘從五位(九月十五日) 内藤 良雄
 瀧澤 芳樹
 敘從七位(以上十月一日) 地方技師 鶴田 定平
 五級俸下賜(九月三十日) 公立實業學校教諭 和田 利彰
 八級俸當分下賜、年功加俸年額百四拾四圓下賜(九月二十六日) 地方農林技師 上原 清夫
 四級俸下賜(九月二十五日) 公立實業學校教諭 高橋 池一
 七級俸當分千五、百六拾圓 地方農林技師 坂田 武
 十一級俸下賜 地方農林技師 芝 荒雄
 六級俸下賜(以上九月三十日) 輸出絹織物検査所技師 手兼貿易局技師輸出 北原 基
 手織物検査所技師 任陸軍技師 敘高等官七等(十月二十三日)

公立實業學校教諭 岡崎 勘助
 九級俸下賜(九月二十三日) 地方農林技師 南澤 清
 七級俸下賜(九月三十日) 南佐久農蠶學校教諭 友野 正路
 公立實業學校教諭ニ任ス、高等官七等待遇 同校教諭ニ補ス、八級俸當分下賜、年功加俸年額百四拾四圓下賜(十月三十一日)
 公立實業學校教諭 中尾 小太郎
 七級俸當分千五、百六拾圓(九月三十日) 鹿兒島高等農林學校教授 中曾根 長男
 從七位 陸軍高等官六等 十級俸下賜(十一月四日) 勳六等 沖 濤治
 敘正七位 公立實業學校教諭 宮島 庄平
 六級俸當分千七、百圓下賜(九月三十日) 朝鮮公立實業學校長 伊藤 喜代
 正七位 敘從六位(一月十六日) (會報第二十一號登載敘從七位「八月十五日」ハ誤リニ付訂正) 勳七等 伊藤 喜代
 敘勳六等授瑞寶章(十月一日)

本校辭令

副手ヲ命シ細紡織科勤務ヲ命ス(十一月二十一日)
 和田 利章
 履ヲ命シ庶務課勤務ヲ命ス(十一月三十日) 村瀬 儀市
 願ニ依リ履ヲ免ス(十二月七日) 村瀬 儀市

計報

戦死會員遺族よりの禮狀

十一月十九日 小縣郡長久保新町 故渡邊 善次氏 父 渡邊 榮八
 十一月十日町葬執行せらる
 十二月十一日 廣島縣加茂郡川上村大字飯田 故飯田 省三氏 父 飯田 常登
 十二月三日村葬執行せらる

弔慰金募集

故中曾根 長男 (遺十四) 故原 正氏 (遺十三) 故原 利直氏 (遺十三) 故尾崎 俊氏 (遺廿九) 以上五氏に對シ弔慰金を募集の上昭和十八年二月末日迄に取纏め御遺族へ贈呈致したいと思ひますから夫れに間に合ふ様振替口座東京四三三三番へ同君に對する弔慰金の旨御記入の上御拂込下さい。 昭和十七年十二月 千 曲 會

弔慰金報告

故古郡友一氏弔慰金 三好 彌市 右合計金貳圓也 故渡邊善次氏弔慰金 小野 忠 右合計金九圓也 山内 一次 吉田 信倍 故古郡友一氏弔慰金 河井 正 右合計金五圓也 累計金拾四圓也 (十二月五日現在)

故渡邊善次氏弔慰金 金五圓也 双美 會 金參圓也 奥村 忠治 西澤 政人 金壹圓也 久保田 不二夫 倉澤 二三 右合計金拾參圓也 累計金貳拾八圓也

御斷り

千曲會報第二十二號は會員名簿號であり、既に御手元に配本済みになつてゐる筈です。従つて本號は第二十三號となつたわけですから此の點特に御承知置き願ひます。

編輯後記

石倉先生が母校を去られることになつた。眞に惜別に堪えない。先生は本會報の有力な執筆者であり、援助者であられたことは何人も御承知のことと思ふ。本會報表題の圖案は實に先生の考へになるものである。本報第百二十七號(昭和十六年一月五日發行)の第一頁最下段に先生自身による此の解説がある故宜しく想見せられたい。又有益な處世訓話を書かれ紙上更に金玉を添ふこと一再ではなかつた。ことに餘白を利し厚く御禮申上げたいた事であらう。此の意氣を以て新年を迎へやう。無事御越年と御多幸を祈る次第である。

昭和十七年十二月二十日印刷 (非賣品)
 昭和十七年十二月廿五日發行
 編輯 上田 蕨 原 清治
 發行 上田 市原町五七九五 二 郎
 印刷 上田 市原町五七九五 二 郎
 印刷 上田 市原町五七九五 二 郎
 發行所 上田 蕨 原 清治 會
 電話 上田 蕨 原 六六六番
 振替口座 東京 四三三三番